

英語授業のペアワークにおける同性ペアと異性ペアの教育効果に関する研究：中等教育における英語学習への示唆

著者	安川 佳子
雑誌名	教育総合研究叢書 = Studies on education
号	13
ページ	147-160
発行年	2020-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1084/00000587/

英語授業のペアワークにおける同性ペアと異性ペアの教育効果に関する研究
—中等教育における英語学習への示唆—

Educational Effects of Same-sex Pairing and Mixed-sex Pairing in Pair Work of
English Classes:
Suggestions for English Learning in Secondary Education

安川 佳子*

Keiko YASUKAWA

抄 録

中等教育における英語学習において、協働学習が一般化している。本稿ではその具体的な教育効果について、英語の習熟度の異なるグループを比較することで解明したい。調査対象は4年制大学の習熟度が異なる3つの学習グループで、それぞれのリーディング授業において協働学習であるペアワークを実施した。そのペアワークの効果、また英語授業および英語学習に対する意識変化等を調査分析するため全講義後、3グループの学習者に対しアンケート調査を行った。その調査結果を分析した結果、学習者の英語習熟の差がペアワークの学習効果および学習意識に大きな差異をもたらすことはなかった。しかしながら、男女の異性ペアと男性同士の同性ペアでは、アンケート結果に大きな差異が認められ、当然、それぞれのペアワークの学習効果、および英語学習に対する意識に高低が生じていた。このことから中等教育における英語の協働学習であるペアワークやグループワークを効果的に展開する前提条件として、ペアリングの異性・同性および男女の比率が重要な要素となりうることを考慮する必要があると考えられる。

I はじめに

英語教育改革にて「高等学校卒業時に、生涯にわたり4技能を積極的に使えるようになる英語力を身に付けることを目指す。」との目標があげられ、中等教育での目標には「英語による情報交換能力や「発表・討論・交渉などの言語活動」能力などの具体的なコミュニケーション能力を高めることが求められている。その学習方法として教育効果が期待されるのが協働学習である。

近年、教育現場において協働学習の重要性とその有効性が多くの文献で紹介されている(Barkley et al., 2014; D. W., ジョンソン他, 2010; 石黒, 2018; 中園・谷川, 2018; 杉江, 2016; 山本, 2015)。大学教育変革の要となっているアクティブ・ラーニングについても、中央教育審議会(2012)

* 神戸山手大学現代社会学部

は、「教育による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授、学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でもグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニング方法である。」と述べ、大学教育においても学修者による能動的な学習を推奨している。江利川（2012）は、協同学習を「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係を育て合う教育の原理と方法である」（p.6）と定義しており、小・中・高・大学いずれの英語授業実践においても、協同学習を導入することの重要性を強調している。

外国語学習の分野においても、協働学習の効果について様々な実証研究が報告され（吉満，2007；田村，2011；池島・福井，2012；中島，2014），とりわけ大学の英語学習におけるペアワーク学習の実践的研究が注目を集めている（津村，2011；和田，2013；角南，2014；小原，2016；城野，2017）。しかし、英語習熟度の異なる学習集団に対し、ペアワーク学習の効果としてどのような差異が生じるのか、その学習効果を比較分析した研究は見られない。そこで、筆者は「学習者が共に学ぶ他者と対話と協働を通じて能動的に学ぶことで、英語への学習意欲やモチベーションの向上を図ること」を目的に、4年制大学において、習熟度の異なる3つの学習グループに対し、それぞれの必修科目である「リーディング」の授業実践として、協働学習であるペアワークを導入し、これに基づき、学習者に対するペアワークの効果、また英語授業および英語学習に対する意識変化を調査し、それを比較し分析することとした。そのことにより今後の中等教育における英語学習にて活用されるであろう協働学習にも何らかの示唆を与えられるものとする。

II 調査の概要

1. 調査と分析について

習熟度の異なる3つの学習グループに対し同様のペアワーク活動を中心とした授業を展開し、それぞれ講座の終了後、受講者に対し選択方式によるアンケート調査を実施した。その後、結果を集計し比較したところ、習熟度の異なるグループによって何らかの差異が生じるかとの推察に反して、男女の異性ペア、と男子同士の同性ペアとの間に顕著な差異が認められた。よって、その観点によりアンケートの質問内容および、その回答結果を分析することにした。

2. 学習グループについて

2.1. 学習グループの概要

A グループ：中国地方の4年制私立大学2年生、「総合英語Ⅲ」（習熟度別クラス）

受講者 24名（男子12名，女子12名）

2019年度前期の講義（4月～8月），講義回数15回

B グループ：中国地方の4年制私立大学2年生、「総合英語Ⅲ」（習熟度別クラス）

受講者 34 名 (男子 32 名, 女子 2 名)

2019 年度前期の講義 (4 月～8 月) , 講義回数 15 回

C グループ: 関西地方の 4 年制私立大学 1 年生, 「総合英語Ⅱ」(習熟度別クラス)

受講者 12 名 (男子 6 名, 女子 12 名)

2019 年度後期の講義 (9 月～1 月) , 講義回数 14 回

2.2. 各グループの特徴

A グループ: 「総合英語Ⅲ」の習熟度別 6 クラス (S レベル 1 クラス・A レベル 2 クラス・B レベ

ル 3 クラス) のうち, 最も高い習熟クラスである。出席率が良好で, 予習などは, 事前に指示を出さなくてもほぼ全員がそれぞれ必要性を感じて行っている。当該授業の復習課題についても, 毎回全員が提出している。また, 教師の発問やペアワーク中の活動等も非常に活発な態度で受講している。受講者 24 名のうち, 約 10 名は英語検定 2 級に匹敵する学力を有している。

B グループ: A グループと同大学で, 別習熟度としては A レベルのクラスである。よって, A グ

ループより 1 段階低い習熟クラスに位置する。授業中は概ね集中して取り組んでいる。教師の発問への反応は, さほど積極的な返答は少なく, 学習活動に活発な能動性は低い。復習課題については, 毎回 2 割程度の未提出があり, その内容についても 5 割が不十分である。テキストによる文法練習問題の指名回答については, 5 人中 3 人がほぼ理解しているなど知識的な英語の習熟度はやや高いと言える。

C グループ: 入学時より中学卒業程度に満たない英語力の者が大多数である。ペアワークの活動

に対しては, 積極的に参加する姿勢があるが, 授業に関連した事柄に端を発した私語が多く, 英語の基本的知識の不足から課題や取り組みへの継続的な集中力が途絶えやすい。自宅課題学習や自主学習の習慣が身につけていない者が多い為か, 提出物や教材忘れなども目立つ。初歩的なレベルの質問に対しても返答が難しい者が大多数である。A グループ, B グループと比較しても明らかに習熟度は低いと言える。

各グループの学期末考査の結果は, 次の通りである。なお, 目安として考査の難易度を高い順に 5 レベルから 1 レベルの 5 段階に分けることとする。

A グループ: 考査難易度は 3 レベル, 平均 79.1 点

B グループ: 考査難易度は 3 レベル, 平均 65.0 点,

C グループ: 考査難易度は 1 レベル, 平均 59.1 点

以上により、各グループの英語習熟度は、Aグループ、Bグループ、Cグループの順列とすることができる。

Ⅲ ペアワーク授業の実際

1. ペアリング

ペアリングについては、次の2つを原則とした。

原則1：ペアリングは、教師（筆者）が毎時間異なる相手を指定する。

原則2：男女均等人数のクラスでは、男女の異性ペアとする。

このねらいは、学生自身がペアリングをすると、仲の良いもの同士となりやすく、学習内容を逸脱した私語や、学習課題への集中力が低下する傾向が生じると推察され、それを避けるためである。また、毎回異なるペアと学習することにより、多様な特質の相手と学習する経験となるからである。

Aグループ、Cグループについては、クラスの男女比率により原則どおりのペアリングで学習を展開できた。しかしBグループについては、34名中女子が2名であることから、原則2が実現不可能であり、88%が男子同士の同性ペアでの学習となった。

2. 使用テキスト

A・Bグループ：『Learning of Practical Grammar from VOA English 読解力向上は基礎文法から—自然・科学をVOAで読む—』（英宝社）

Cグループ：『World link Intro』（Cengage learning）

3. ペアワークの学習内容

(1) Pre-reading Tasks

① 題材への興味喚起活動

テキストを閉じたまま、ICT教材で、学習するテキスト内容に関連する写真など視聴させ、それぞれの既存知識を思い起こしながら、ペアでこれから学習するテキスト内容を対話しつつ推測させ、英語またはグループによっては日本語で発表させる。

② CD音声からキーワードの聞き取り活動

テキストを閉じたまま、テキストの本文をCD音声によって聞き取らせ、話題のキーワードと考えられる語句を書きとらせ、ペアでその語句を相互に確認させる。

③ 概要理解活動

教師が作成した設問プリントで、テキストの本文概要等に関する選択肢問題を解かせ、ペアで相互に確認させる。

(2) During-reading Tasks

① テキストのペア音読・ペア・シャドーイング活動

テキストを開き、本文の音読をそれぞれ行わせ、のちペアでシャドーイング活動を行わせる。

② 重要単語・熟語の確認

教師の作成した新出単語・重要熟語の設問プリントをそれぞれ解答させ、のちペアで相互に確認させる。

③ 重要構文・文法事項とその和訳確認

教師が作成した重要文法事項に関する設問プリントをそれぞれ解答させ、のちその英語構文の和訳をペアで相互確認させ、発表させる。

④ テキスト訳語の確認

ペアで、交互にテキスト本文を1文ずつ和訳させる。

⑤ 訳語の発表と内容確認

教師がテキストの本文についてその和訳を指名発表させ、必要に応じて教師が補足説明と解説を行う。

(3) Post-reading Tasks

① ペア・シャドーイング活動

テキストの本文の和訳を確認した後、再度ペアによるシャドーイング活動を行う。

② ワークシートによるテキスト内容理解確認（学習の再確認）

教師が作成した読解設問プリントをそれぞれ解答させ、のちペア相互で確認させ、発表させる。

③ 設問作成と質疑応答

それぞれテキストの内容について英語設問を2問作成させ、ペア相互に解答させ、適宜指名し作成した設問を発表させる。

④ テキスト retelling 活動

テキストを閉じさせたのち、ICT を使って本文のキーワードを提示する。そのキーワードが本文のどのような内容のものであったかを、それぞれペア同士で英語を用いて対話させる。

⑤ 読後の自己表現活動

英語でオープンクエスチョンを行い、それぞれペア同士でそのクエスチョンに対する感想や意見交換を英語で行なわせ、のちその内容を英語で発表させる。ただし、Cグループについては、日本語でも可とした。

IV アンケートについて

1. アンケートの概要

各グループとも、全講義の終了後に調査を実施した。質問項目は、「ペアワーク」に関する質問が23項目、「英語学習」に関する質問が23項目で合計46項目である。回答方式については、「とても

そう思う」、「まあまあそう思う」、「あまりそう思わない」、「全くそう思わない」の4段階の選択方式とした。

2. アンケート分析の観点

各グループの特徴が顕著に表れてくる質問項目を抽出して分析する。特に分析については次の2つの観点を重要視した。

観点Ⅰ：各グループの英語習熟の差異。前述のⅡ 2.2の通り、各グループの英語習熟度は、Aグループ、Bグループ、Cグループの順列である。

観点Ⅱ：異性ペアと同性ペアの差異。

前述のⅢ 1.のとおり、Aグループ、Cグループについては、

男女による異性のペアリングであり、Bグループについては、男子同士の同性ペアである。

3. アンケート結果とその考察

3.1. 「ペアワーク」に関する質問1 「ペアワークは楽しい」

そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

Aグループ：75%（33.3%・41.7%）

Bグループ：61%（14.7%・47.1%）

Cグループ：92%（33.3%・58.3%）

分析：ペアワーク学習を「楽しく」感じたか否かについてであるが、習熟差にかかわらず、AグループとCグループは、ともに約8割以上が「楽しく」感じたと答えている。しかしBグループは6割にしか過ぎず、さらに「とても思う」は14.7%である。英語の習熟度が高ければ、それに伴ってペアワークの充実感も高まるとは言えない結果である。結果の差をグループの特性に求めるならば、男女の異性ペアと男性同士ペアの差異によると考えられる。

3.2. (1) 「ペアワーク」に関する質問3 「ペアワークでは、普段話さない人とも話せる」

そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

Aグループ：91.7%（29.2%・41.7%）

Bグループ：67.7%（26.5%・41.2%）

Cグループ：91.6%（58.3%・33.3%）

分析：ペアワークにおいて、毎回異なるペアと学習することが好意的に受け取られたのかどうか判断できる質問である。Aグループ、Cグループは約9割以上が評価している。しかしBグループは約7割であり、かつ「とてもそう思う」と回答した者は、26.5%であった。一般的に、他者が決めた男女ペアの場合、恥ずかしさや照れ、または英語への苦手意識な

どがペア学習の活性化を停滞させることが推察される。また、男性同士のペアの場合は、同性である気安さから協働学習が活性化すると想像される。しかし、結果はその真逆となっている。異性ペアの方が男性同士の同性ペアより、普段話さない相手と話せることに対して、好意的に受け取っているのである。では、なぜ男性同士の同性ペアでは評価が低いのであろうか。

(2) 「ペアワーク」に関する質問6『ペアワークでは、毎回違うペアで面白い』という質問に対しては、次のように回答している。

そう思う (とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 66.7% (29.2%・37.5%)

B グループ : 53.0% (20.6%・32.4%)

C グループ : 83.0% (33.3%・50.0%)

分析 : この質問は、質問3「ペアワークでは、普段話さない人とも話せる」とは異なり、毎回ペアが変わることについて、それを「面白かった」と評価しているかどうかを問うている。このペアワークでは、普段話さない人と話せる機会となるのであるから、3.2.(1) 質問3と質問6は、同様の結果が予想されるはずである。しかし、Cグループは8割以上が評価しているが、Aグループは、Cグループほど高くはない。また、毎回ペアが変わることを「とても面白い」と評価したのは、各グループとも約3割未満である。すなわち、この質問の結果とは、「毎回ペアが変わることに対して、恥ずかしさや照れなどを感じる者が少ない者」の割合であると考えられるのではないか。さらにBグループでは、男性同士ペアにも関わらず、毎回変わるペアを「とても面白い」と評価したのは、20.6%に過ぎない。このことから、男性同士の方が、毎回変わるペアになることについて、なんらかの抵抗感または苦手意識を持っているのではないかと推察される。

(3) そこで、異性ペア・同性ペアに関する質問を分析してみよう。

「ペアワーク」に関する質問8「異性のペアが良かった」

そう思う (とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 29.1% (8.3%・20.8%)

B グループ : 32.4% (5.9%・26.5%)

C グループ : 58.4% (16.7%・41.7%)

「ペアワーク」に関する質問 11 「同性（男性同士・女性同士）のペアが良かった」
そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

A グループ：58.4%（16.7%・41.7%）

B グループ：67.7%（11.8%・55.9%）

C グループ：83.3%（33.3%・50.0%）

分析：「異性ペアが良かった」という質問に対して、各グループとも「そう思う」という評価は高くない。さらに、「同性ペアが良かった」という質問に対しては、「そう思う」という回答が各グループとも高い。3. 2.（1）で述べたように、ペアリング対して、他者が決めた男女ペアで学習することに対して、恥ずかしさや照れ、または苦手意識からくる感情が、このような結果に結びついているのではないかと推察される。さらに、A グループ、C グループについては、同性ペアの経験がなく、B グループについては異性ペアの経験がない前提での回答であることに留意しなければならない。仮に、質問 8 および質問 11 にある「同性ペアまたは異性ペアがよかった」との思いが、ペアワーク学習に影響したとすれば、異性ペアはその学習に対する評価は低く、同性ペアはその学習に対する評価が高くなるはずである。しかし、3. 1. および 3. 2.（1）の結果は、それと比例していないのである。

3. 3. 前述から「ペアワークを積極的に取り組めたかどうか」の評価について分析をしてみる。

「ペアワーク」に関する質問 2 「ペアワークでは、積極的にになれる」

そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

A グループ：75.0%（33.3%・41.7%）

B グループ：57.9%（8.8%・47.1%）

C グループ：92.0%（33.3%・58.3%）

分析：前述の 2（3）質問 8、質問 11 の結果からすると、異性ペアは積極的になりにくいと予想されるが、A グループ、C グループとも約 8 割以上が「ペアワークでは、積極的にになれる」と評価している。反して、B グループは 57.9% であり、さらに「とてもそう思う」は 8.8% にしかすぎない。すなわち、男女の照れや恥ずかしさ、または苦手意識などの感情があったとしても、異性ペアは、ペアワークの学習課題を積極的に取り組む傾向が強く、男性同士の同性ペアは積極的になれない傾向があるということである。

3. 4. 「ペアワーク」に関する質問 17 「ペアワークは後半になるにつれて慣れてきた」

そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

A グループ：66. 7% (29. 1%・37. 6%)

B グループ：67. 7% (11. 8%・55. 9%)

C グループ：75. 0% (41. 7%・33. 3%)

分析：どのグループも約15回のペアワーク授業を行ったが、「学習形態に慣れたか」という問いに対して、各グループとも「そう思う」は、約7割以上である。これは、授業の形態や展開に慣れたということであろう。特に、「とてもそう思う」が全グループ約4割以下であることからすると、毎回、他者が選んだ新たなペアで学習する事に対して約6割の者が、最後までなんらかの緊張感をもって取り組んだと解釈される。Aグループ、Cグループでは、異性ペアであることの緊張感かもしれないが、Bグループでは、男性同士ペアであるにも関わらず、「とてもそう思う」、すなわち「授業を重ねるにつれて慣れた」と意識する者が11.8%しかいない。これは3. 1. 「ペアワークの楽しさ」や、3. 3. 「積極的な取り組み」が、男女の異性ペアでは評価され、男性同士の同性ペアでは評価が低いことを考えると、男性同士であることに何らかの要因あるのではないかと推察される。

3. 5. 「ペアワーク」に関する質問 9 「会話をしながら英語を学べた」

そう思う（とてもそう思う・まあまあそう思う）

A グループ：70. 8% (12. 5%・58. 3%)

B グループ：64. 7% (11. 8%・52. 9%)

C グループ：91. 6% (33. 3%・58. 3%)

分析：ペアワークでは、相互の対話が重要な学習活動の要素になる。そこで、「会話が弾んだかどうか」をこの質問から分析してみることにする。異性ペアであるAグループ、Cグループでは約7割以上の者が「会話が弾んだ」と意識しており、男性同士の同性ペアであるBグループでは約6割となっている。ここにおいても、英語の習熟度は結果と比例しておらず、反して習熟度の低いCグループのほうが高い結果となっている。Bグループの結果が最も低く表れているのは、習熟度の差とは言えず、あるとすれば男性同士であるがゆえの何か働いていると推察される。

3. 6. 「英語学習」に関する質問9 「わからないことを素直に聞けるようになった」

そう思う(とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 75.9 % (12.5%・62.5%)

B グループ : 41.0% (17.6%・29.4%)

C グループ : 92.0% (33.3%・58.3%)

分析：ペアワーク学習における会話の活性化の要素として、相互にわからない事を素直に聞けるか否か、が要点である。3. 2. (3) 質問8および質問11の結果からすると、「同性の方が良かった」すなわち「同性の方が分からない事が聞きやすい」と解することができる。しかし、この質問9の結果によると、Aグループが約8割、Cグループが9割以上「素直に聞けた」と回答している。逆に男性同士の同性ペアであるBグループは、約4割に留まっている。すなわち、他者によって決められた方が、「わからないことが素直に聞ける」傾向が極めて高く、逆に男性同士になるとその傾向は一層低くなる。この理由については、様々な条件に基づいたデータが必要であり、本稿では分析に利するアンケート質問を設定してないので、後の研究を待たねばならないであろう。

3. 7. 「英語学習」に関する質問11 「英語授業が充実していた」

そう思う(とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 70.8% (37.5%・33.3%)

B グループ : 55.9% (8.8%・47.1%)

C グループ : 100% (33.3%・66.7%)

分析：ペアワーク授業に対して、充実感を感じたか否かについては、Aグループ、Cグループは共に約7割以上が評価している。しかし、Bグループは約6割弱に留まっている。特に「とてもそう思う」では、AグループとCグループは、約3割。Bグループは1割に満たない結果となっている。Cグループでは「そう思う」が100%であることから、習熟度の差異の結果とは言えず、ペアワークの諸活動を学習者がどう経験したかの表れであり、異性ペアのAグループおよびCグループは充実感が高く、男子同士の同性ペアであるBグループは充実感が低い。これによれば、協働学習形態において、男女の異性ペアは異性ペアであることによって、学習効果が得られやすい要素があり、男性同士の同性ペアは、男性同士であることによって、学習効果が得られにくい傾向があるという事実を示しているのではないかと推察できるのではないだろうか。

3. 8. (1) 「英語学習」に関する質問 14 「英語に関する苦手意識が低下した」

そう思う(とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 70.8 % (12.5 %・58.3%)

B グループ : 35.3 % (2.9 %・32.4%)

C グループ : 66.6 % (8.3 %・58.3%)

分析 : ペアワーク授業を経験した結果、これまで感じていた「英語への苦手意識が薄らいだ」と感じた者が、A グループ、C グループともに約7割もいる。しかし、B グループでは、35.3%に留まっている。すなわち習熟度に関係なく、英語への苦手意識があった者にとって、ペアワークがその意識を変えたと言えるのである。しかし、B グループは、C グループより習熟度が高いにもかかわらず、低い結果となっているのである。

(2) 「英語学習」に関する質問 12 「英語学習への意欲が高まった」

そう思う(とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 87.5 % (29.2 %・58.3 %)

B グループ : 53.0 % (5.9 %・47.1 %)

C グループ : 91.0 % (50.0 %・41.7 %)

分析 : 3. 8. (1) 質問 14 をより一般的かつ肯定的に問うている質問である。「そう思う」が、A グループ、C グループは約9割以上、B は約5割となっている。これも習熟度の差異は見られない。このことから、男女の異性ペアでの協働学習のほうが、学習効果を高めるペアリングであり、逆に男性同士の同性ペアは、学習効果が低いという 3.7. と同じ推察が成り立つと思われる。

3. 9. 「英語学習」に関する質問 20 「自分の考えや思いを英語で表現したくなった」

そう思う(とてもそう思う・まあまあそう思う)

A グループ : 62.5 % (12.5 %・50.0 %)

B グループ : 35.3 % (8.8 %・26.5 %)

C グループ : 75.0 % (25.0 %・50.0 %)

分析 : 英語の協働学習において、大きな目標である個々の実生活で英語に積極的に親しむことや、英語を積極的に使用する事が実現するためには、その学習者の意識が高まる事が必須である。A グループは約6割、C グループは約8割がその意識を持ったとの結果であると考えられる。しかしB グループについては、約4割しかその意識を自覚していない。ペアワークは、他者に決められたペアリングの相手と「対話」することが不可

欠な学習活動である。その対話体験が「英語での自己表現」に対する壁を低くさせていると言える。それが、男女の異性ペアが協働する場合は、より一層「対話」が効果的に体験される。しかし、これまで各質問の分析で述べてきたように男性同士の同性ペアでは、協働ならびに「対話」が効果的に体験されにくいという結果となっているのではない。

V まとめ

3つの異なるグループのペアワーク学習において、顕著に表れた特徴として、ペアワークは、英語の習熟度の高低が、そのまま学習効果の良し悪しに比例するものではなく、それ以上に協働学習の効果の大前提として、男女の異性ペアのほうが、男性同士の同性ペアより学習効果が高いということが認められたことである。

この分析結果が妥当であるか否かは、協働学習であるペアワークやグループ学習の実践にとって大きな問題である。協働学習における男女の比率に関する先行研究は見られないが、女子学生は協同的な学習スタイルを好む傾向にあることから、参加者が全員女子だったため、本研究では好意的な結果になったかもしれない」との先行研究がある(角南, 2014; Sunami-Burden, 2014)。しかしながら、全員男子学生による協働学習の教育効果についてのデータはないためその比較は困難である。

本研究の分析から、協働学習において、男女比または異性ペアが学習条件として効果に大きく影響するとの仮説が妥当ということになれば、これまでの協働学習のさまざまな実践における教育効果の評価判断の再検討が必要ということになる。特に今後英語によるコミュニケーション能力を高めることが求められている中等教育においては、協働学習の方法論や活動内容の工夫や研究も重要であるが、その前提となるグループの男女比率やペアの同性、異性の別に留意をしなければならないということである。そのためにも、今後の協働学習における男女のペアリングによる教育効果に関して研究をすすめる意義は大きく、さまざまな条件による実践データとその分析が必要となる。

1) 男女の異性ペアの経験と同性ペアでの学習経験の結果の比較検討, 2) グループワークでは、男女の比率がどう教育効果に影響するかの研究, 3) 協働学習を構成する集団の合計人数の差異による結果の比較検討, 4) 社会的や内向的といった集団に属する個々の学習者の特性と、それが集団全体にどう影響するかといった研究である。

また、これら研究より得られた結果を心理学的観点からアプローチするなど、研究を多角的に発展させていく必要を感じている。調査方法も、協働学習中における学習者同士のやり取りを録音し分析することや、個別インタビューを行う等、詳細なデータを集積し、男女比率問題や活動内容など英語学習における協働学習の教育的効果を探求していきたい。

この研究の展開により、協働学習において、例えば、男子同性ペアによる効果的な活動内容やグループ学習のそれぞれの男女比率に適した活動内容を選択することができるようになるのではないかと考える。

【参考・引用文献】

- 1) Elizabeth F. Barkley, E.F., Major, C. H., and Cross, P. Collaborative Learning Techniques: A Handbook for College Faculty, Jossey-Bass, 2014
- 2) Sunami-Burden, K. “Cooperative learning in EFL reading class in the tertiary education; a way to improve the classroom climate through a communication tool”, *Chugokugakuen Journal*, Vol 13, 15-20, 2014
- 3) D. W. , ジョンソン, R. T. , ホルベック, E. J. / 石田裕久・梅原巳代子・訳『学習の輪—学び合いの協同教育入門』, 二瓶社, 2010
- 4) 石黒圭編『どうすれば協働学習がうまくいくか 失敗から学ぶピアリーディング授業の化学』ココ出版, 2018
- 5) 池島徳大・福井淳也「ピア・サポートを活かした協同学習」『奈良教育大学教職大学研究紀要』4号 55-60頁, 2012
- 6) 江利川 春雄『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店, 2012
- 7) 小原弥生「ペア活動を中心とした音読指導の影響—学力テストとアンケートの結果から—」『関西英語教育学会紀要』39号, 37-56頁, 2016
- 8) 城野博志「ペア学習を楽しめない学生はやる気がないのか。」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』28巻2号 115-123頁, 2017
- 9) 杉江修治編『協働学習がつくるアクティブ・ラーニング』明治図書, 2016
- 10) 角南バーデン京子「高等教育におけるリーディングの協同学習の効果—協同学習の導入による学習者の読書意欲喚起—」『中国学園紀要』13号, 87-95, 2014
- 11) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）」, 2012
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 12) 中島基樹「短期大学の英語 Reading 授業における協働学習の結果検証」『長野県短期大学紀要』69号 111-121頁, 2014
- 13) 中園篤典・谷川裕稔『アクティブ・ラーニング批判的入門』ナカニシヤ出版, 2018
- 14) 田村総子「高等学校外国語（英語）における効果的な音読指導法の研究—ペアワーク等を取り入れた音読活動を通して」『神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告』9号 55-60頁, 2011
- 15) 津村修志「英語学習を嫌う大学生のペアワークに対する意識」『大阪商業大学論』9(2), 39-52頁, 2013
- 16) 山本崇雄『はじめてのアクティブ・ラーニング! 英語授業』学習書房, 2015
- 17) 吉満たか子「外国語教育におけるペアワークの有効性: ドイツ語授業での実践を基に」16)『広島外国語教育研究』10号 169-195頁, 2007
- 18) 和田珠美「協同学習理念を取り入れた英語リーディング授業」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』14号, 2013

Abstract

The purpose of this paper is to demonstrate how pair-work activities in English reading classes affect learners' perceptions on learning English. In order to examine their perceptions, a questionnaire survey was conducted at the end of the semester among three classes of Japanese university students taking mandatory English classes. There was a beginner class, an intermediate class and an advanced class based on students' level of English proficiency. The responses from the three different classes were compared in terms of the sex ratio of each class. Both the advanced and beginner classes consisted of approximately the same number of males and females, while almost all students were males in the intermediate class.

The results revealed that pairing, especially mixed-sex pairing, has a significant effect on learners' perceptions on learning English regardless of the learners' English proficiency differences.